

ブラジルのイディッシュ文学

ロゼ・パルトニク短編3編

西 成 彦(訳・解説)

自己の出自 (roots) あるいは先祖がたどってきた足跡 (routes) をとらえなおすアイデンティティー探しの文学は、米国を含め、アメリカ大陸の英語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語文学の中で、いま現代文学の大きな潮流のひとつを形成しつつある。先住民系・ヨーロッパ系・アフリカ系・アジア系、さまざまな流民もしくは移民が隣接・混交の生存状況を生きている中、一方で同化主義と国民統合へと絡め取られていったアメリカ大陸の住人たちは、いま、「アメリカ人」なる概念の複数性を担保すべく、多言語・多文化主義の一実践として、そして存在証明の一手段として、小説というメディアを可能なかぎり活用しようとしているのである。

私がこれから紹介しようというブラジルのユダヤ系文学は、こういった大きな潮流の源流として位置づけられるものであり、しかもアメリカ大陸の全域において、ユダヤ系作家のアイデンティティー確認作業は、日系アメリカ文学など、その他の伝記的アイデンティティー探求の文学的範例のひとつとなっているとさえ言える。しかも、アメリカ大陸に東欧地域からユダヤ系移民が大量に渡るようになるのは十九世紀末のことで、彼ら彼女らはイディッシュ語という共通語を母語として背負いながら、大西洋を横断した。アメリカ大陸のユダヤ系文学は、ひとまずイディッシュ文学として姿をあらわしたのである。じつは同じことが日系文学についても言える。あらゆる移民集団が同化以前に自言語文学という近代的な文学様式を同じ質や量で所有していたわけではないことを考えると、日系文学とユダヤ系文学は、アメリカ大陸において最も巨大なアーカイブを有する第一世代の特殊移民文学として同じ範疇の中で捉えなおすべきなのかもしれない。

したがって、以下の翻訳は単にブラジルに渡った東欧系ユダヤ人の移民文学という枠内ばかりでな

く、日系文学をも含む、移民第一世代が同化以前の自言語を用いて創作活動を行った事例のひとつとしても読まれうる可能性を秘めていることになる。

*

ここに紹介するロゼ・パルトニクは、1904年、ロシア領ポーランドの地方都市クラシニクの生まれで、自学自習のすえ、16歳の若さで独立ポーランドのユダヤ人小学校の補助教員となる。しかし、1929年にポーランドを離れて、一時はパリで生活。その後、1936年にリオデジャネイロへと渡る。ポーランド時代から書き始めていた小説をブラジルでも書き続け、イディッシュ語新聞に掲載。ここに訳出した三篇は短編集『クラシニク-リオ』(1953)および『13の短編』(1961)、『短編選』(1966)からブエノスアイレスの『イディッシュ文庫』の編者シュムエル・ロジャンスキが『第58巻：ブラジル・イディッシュ選』(1973)に再録した3つである。いずれも移民一世の明暗をコミカルに描いたもので、ユダヤ的背景への過剰な執着に対しても、過剰な同化適応主義に対しても、等距離を保ちながら、持ち前の皮肉をはたらかせようとするイディッシュ文学ならではの特徴をよくあらわしている。こうした描き方は、東欧を離れた移民層のイディッシュ文学に限らず、ロシア(ソ連)やポーランド、ルーマニアあたりのイディッシュ文学の特徴としてもすでに実験済みの方法の援用でもあった。ただし、比較的女性作家の少ないイディッシュ文学の世界で、ロゼ・パルトニクは中高年のユダヤ人女性移民の内的現実に鋭く切り込んでいると言えるだろう。

ただし、ユダヤ系女性の南米移民に関しては、その後、1980年代以降のフェミニズムの立場からの歴史的研究の成果として、ブラジルやアルゼンチンにおけるユダヤ系女性の売春活動の実態がだいに明るみに出されてきている。ロゼ・パルトニクの筆

がそういった同胞への配慮を欠いているのは、彼女が作品を発表していたイディッシュ語メディアの自己規制もさることながら、彼女自身が比較的成功的なユダヤ系移民の適応＝反適応の狭間に揺れる内面にメスを入れるという方法を選び取った結果だったのだとも言える。

また大西洋をはさんだ対岸での「ホロコースト」に対する反響を描くことに消極的だったというのも彼女の限界のひとつだろう。これも好意的に見れば、自身、「ホロコースト」経験者ではない彼女なりの自己規制の結果であるには違いなかったが、同世代（しかも生年は1904年、アメリカ大陸への移住も1935年で、経歴的にはロゼ・パラトニクときわめて近い）のイディッシュ語作家イツホク・バシェヴィス（＝シンガー）が、戦中から戦後を通じて、ホロコースト犠牲者およびサイバイバーを頻りに小説の中に登場させたのと比べると、少し物足りない気がする。

こうやってないものねだりを続けることは容易だが、はたして移民文学を語るにあたって、私たちにないものねだりを行う権利などあるだろうか。移民文学は誰によって誰に向けて書かれているのか？特に日本文学研究のように、移民文学を日本文学の傍流のようにしか扱ってこなかった文学研究の隙間を埋めるために移民文学に関心を寄せようという立場に立とうとするなら、ましてや論じる側の立脚点の確認作業は不可欠だろう。その点、それ自身、ディアスポラの文学として成立し、膨大な作品群を世界各地に生み出したイディッシュ文学の例は、私たちが日本語で書かれた移民文学を扱うにあたっての構えに、重要な再考をせまるものであるという予感だけは、訳者にある。

いずれイディッシュ文学史を語るように日本文学史を語る事ができたら……とうのが、『移動文学論イディッシュ』（1995年、作品社）以来、懸案となっている私の夢である。

なお、ここで翻訳の底本に用いたのは、上記、シュムエル・ロジャンスキ編になる *Antologie-Brazilianish* (Ateneo literario en el IWO, Buenos Aires, 1973) である。

泥人形メフル

グリーネ〔＝新顔〕のヘネが名高いミシェル製作所の長い廊下を、ぺたぺた小刻みな足取りで歩いていく。煌々と灯るあかりに待合の人々が照らされて見える。おどおど椅子に腰掛けた彼女もまたボスに会う順番待ちのひとりだ。

眺めていると、黒人や白人の従業員がドアからドアへ紙ばさみや書類を持って足早に出入りし、目で合図を交わし合っている。こうやって、黙々と仕事をこなしている。

奥の方から重たいミシンを踏む鈍い虫の音のような音がきこえる。ときおり甲高いホイッスルやマイクを通した太い声が響く。

ヘネはずっと爪をかんでいて、所長室の白い表示板をながめては声に出してみる。これでもう十度目になるだろうか。いかめしい字体でPRIVAT〔＝部外者立入禁止〕と書かれている。

ぶ・がい・しゃ・たち・いり・きん・し
心の中で呟いてみる。人間にはそれぞれの人生がある。公的生活。私的生活。よそゆきの顔、内向きの顔。しかし、そんな人生の使い分けとは無縁な人もいることは知っている。よそゆきの顔も自分の顔も持ちあわせない人々。それは何の変哲もない人々。すっかり神の世界の方を向いている。わたしの世界、あなたの世界、私たちの世界、どれにも縁がない。つまり定員外の間人。

ヘネは、あの工場主を訪ねるべきかどうか？で何週間も悩みつづけた。なにせ郷里ではゴレム〔＝泥でこしらえた人造人間〕で通っていた男だ。ばったり会うと、たいてい呼び止めて、大きな声で話しかけてくる。

ハロー、新顔のお嬢さん、ご機嫌いかが？
いつもは気が強く生意気なヘネだが、その狎々しさにはしどろもどろになる。

ブラジルでは手拍子を打つの？ けっきょく間の悪いタイミングで返事をするかっこうになる
それともノック？ ブラジル人を訪ね歩くとき、かならずまごついてしまう。どちらでもいいものなのかね？

金持ちが相手だとふつうは他人行儀にしか話せない

い彼女だが、おしもおされぬ名士が相手でも、この男の前に出ると勝手が違う。

どこからともなく、名前を呼ぶマイクの声が聞こえるが、彼女ではない。何度も待ってから、ようやく番が来た。

ハロー、ヘネじゃないか！ 敷居を跨いだだけで男の声だと判った。

おかけなさい、ヘネ！ あの狎々しい声だ。気の強いヘネはどこへ行ったのやら、またしても自分を見失ったヘネは、しおしおと席に着いた。

あんたの工場で何か仕事はみつからないものかと思って... 穏やかにこう切り出しながら、彼女は壁にできた一点の染みを見ていた。もうブラジル人を訪ね歩く元気がなくなっちゃって...

さらに思い切って、こうも言った 白土の坂道を登るのにも疲れちゃったし...勤め口のことなら、やっぱりあんたにお願いするしかないかなって... 頭の中に用意していた文句をいっきに吐き出した。

窓の外はとつぜん暗転した。黒雲が重なり合い、木の葉のざわめきが窓越しに聞こえてきた。きれいに磨かれた窓ガラスには、金のロケットのような稲妻が走った。そのとき工場主の胸に同じく閃くものがあった。それほどの年齢でもないのに艶を失ったヘネの肌、おでこの皺、赤みのない頬を横目に見ながら、この女に会うたびに運命的な近しさを覚える自分を感じた。ヘネというよりは、ヘネレ〔＝ヘネの愛称〕と呼びたい感情が湧き起るのだ。

ブラジルに来てこんなになるのに、どうしてもっと早く来のなかったんだい？ 冷やかすように彼は言った いつまでもグリーンネそのまんまじゃないか。よほど水が合わないのかな 狼狽を隠そうとする彼女を、彼は親しみをこめた目で見つめた。

君はばかばかラッパを鳴らすタイプじゃなかったわけだ... こう言うと、工場主はなかば本気、なかばふざけながら、ヘネの頬に唇をあてた。はにかんだヘネはくると背中を向け、相手をにらみつけた。

相手にしてもらえなかったただだよ 息ができなくらいの圧迫感が彼女を襲った 安息日

も祝祭日もないような生活が始まって...あっちでは根っこを引き抜かれ、こっちでも根を下ろせない...まるで浮草のような日々... 堰を切ったように言葉が奔流となって溢れ出した。

夕食を食べに出直してこないか。つもる話もあるだろう！ 工場主は手を差し出した。

マイクを通して声がした はい、次の方！

*

面会時間が終わると、大工場主はさっそく運転手と呼び、青いドライブカーにゆったり腰を下ろした。これといったあてがあったわけではない。あたりを一周してくれと指示した。空まわりをしたゴムタイヤが動き出すと、思いは自然と過去へ遡っていった。

ブラジルの港に着いたのは二十五年前。熱帯らしい夏の日だった。くたびれて変形した靴。灰色のすりきれたズボン。みどり格子のシャツ。まるでお祭りで見かける手まわし自動オルガン奏者のようだった。

彼を貧相な田舎者のハシディストだと勘違いしたユダヤ人仲間は、想い出したように、昔ながらの綽名で話しかけてきた ショレム・アレイヘム〔＝やあやあ〕、ゴレムじゃないか と。

かつて居酒屋で一緒にスリをはたらいたこともある悪友のペイセフは、遠くからメフルを見つけると、ぴかぴかの新車のクラクションを鳴らしながら、開口一番、偉そうに言ったものだ。

よお、こういう田舎者も一人はいないとさびしいもんだ。ようこそブラジルへ！

あざけるような笑みを浮かべながら、つつかつかと歩み寄ったのは、シメレ・スノビクだ。

こりやまた、とんでもない野郎を寄越してくれたものだけ。 それから指を突き出しながら

おまえなんかゴレムだもん、せいぜい泥の中をはいまわることだな

シメレとはよく豚箱で相部屋になった。ベッドを占領して、メフルには暖炉のところで寝ると指図したのがこいつだ。なにしろおじいさんが有名人だったとかで、お高くとまっているシメレに比べて、メフルは両親が誰かもはっきりしない。

父親の笑顔とも母親の愛撫とも無縁に育ったメフ

ルは、住む家もなく、いけ好かない相手にも頭を下げ、ほとんど物乞い同然の生活をくりぬけて大きくなった。

しかし、昔の仲間がブラジルで商売を始めたと聞いて奮起した。国境を破り、船室にもぐりこみ、陸路海路あわせて、何ヶ月も空腹とたたかいながら、とうとう新天地へとたどり着いた。しかし、やっとこさ、たどり着いたとはいっても、なにかもが過去のくりかえしだった。ゴレム、針金使い、物干竿、オルガン弾き。綽名も昔そのまま。そこでひとこと。

うるさい、イカサマ野郎。今に見てる、おまえらなんかにや、負けないぞ...

そこで二人の仲間がよってたかって、メフルに最初の一步を刻ませようと、知恵を授けた。新米メフルの角に磨きをかけるのだと、たいへないれこみようだった。なにごと経験だ。馬子にも衣装。ばかばかしいとは思いつつ、メフルは白土の斜面を登っていくことを承知した。ただふざけた調子で玄関をノックしてまわるように言われたのには驚いた。しかも、いくらがんばっても商売にはならない。ひょっとして、どいつもこいつも教えるふりをして、先輩風を吹かせただけかもしれない。メフルはとうとう麦藁帽子を放り投げた。暗く曇っていた目がかげん輝きを帯び 今日をかぎり、おれはおし売りなんて卒業するぞ！

意を決して、着ている衣装をぜんぶ脱ぎ捨てた。

手綱も轡もお返りする。こんなばかみみたいなこと、だれが続けるものか！

すかっと肩の荷の下ろしたメフルは静かに山を下りた。

*

コパカバーナの砂浜が見渡せるアスファルト道を、工場主のデラックス乗用車が悠然と静かに走り抜けた。

ぶあつく垂れ込めていた雲もいつしか薄れてきれぎれになり、最後の残り日がかすかにざわめく波頭を照らしていた。むしろ海の青色を映し出しているのは一列に並んだ照明灯の方で、その光は沖合まで延びている。メフルは、あらためて渡航して間もない時代を思い出した。再出発の日々のことだ。片手

に派手なネクタイの束。もう一方に膨らませた赤い風船。シルクの生地やハンカチは両肩に分けてかつぎ、腰まわりには紐に通した子供のおもちゃ。ポケットには白粉、口紅、香水、それら女性化粧品のありったけ。水汲みが天秤棒をかついで歩くようで、遠目にはさながら移動バザールだった。

これを機にメフルはユダヤの行商人に新しいスタイルを導入したのである。玄関をノックするのではなく、子供の呼子をならす方法だ。商品名を大声で連呼するのを止めて、辻芸人みたいに唄をこしらえて歌い歩く。どこかの奥さんが窓を開けてくれたら、しめたもの。さっそく目を七色に輝かせ、職人的な腕さばきでジャケットの赤布をくりとまわして香水を振り撒くや、ダ・リセンサ（=よろしいでしょうか）。重い靴を引き摺って玄関にとびこむ。中に入ってしまうと、あとは立て板に水、休む間もなく話しつづける。

タク・トチノ〔=はい、そのとおりであります〕
フシェ・ラヴノ〔=どちらもお似合いですね〕
ビッテ・シェン〔=どうぞどうぞ〕
ドラチェーゴ・ニエ〔=いいじゃありませんか〕
神をも恐れぬポリグロットと化したメフルは、商談がまとまるまで艇子でもそこを動かなかった。

ひとり住まいの自宅には、ぴかぴかのネクタイピンや指輪や鎖や時計が溢れるようになった。そしてまるで恋人を見るように、売り物に見とれるのだった。そして商品に頼りししながら、ひとりごちる
どんどん大きくなってくれよ...そうすれば豪華なショーウィンドーになる。ペイセフケもシメレも腰を抜かす。新米のおれをコケにしてくれたお返しだ

こうして呼子と唄から始まった時代は終わり、ある晴れた日、目抜き通りの一角にライトブルーに金の角をあしらった新しい看板がお目見えした。空に月が浮かぶ絵柄だ。そしてその角だか三日月だかはぐるぐる回転する仕掛けになっていて、CASA MICHEL〔=ミシェルのお店〕というイルミネーションが点滅する。

メフルは、名前をブラジル風にミシェルと改めることに多少抵抗を覚えたが、こう言い聞かせた

これは今だけだ。あの生意気な連中に一泡吹かせてやればそれで十分。それまではミシェルで行こう...いつでも後戻りはできる。悩むことなんかない。メフルはユダヤ風の名を恥じているわけではない。ペイセフなんて手形に「ペドロ」と書くのがやっとのくせに、眠るときには枕元にヨイズル〔=イエス・キリスト〕、足元にマリアおばさん〔=聖母マリア〕、かたわらには非ユダヤ人の女を従えてる。あんな奴とはわけが違う...かといって、物干竿のシメルケはシメルケで情けないといったらありゃしない。「シモン」になりきるどころか、それに合わせてかみさんまで ドナ・エスペランサ！ と呼んで悦にいつてる。ピクルス漬のきゅうりみたいな女とヤクザ男じゃ、さまにならないというのに ...

同郷のみんなから噂を立てられた時代が今では懐かしい。あのゴレムがいかさま商法をやってるとか、声を震わせて人妻をうっとりさせてるとか、怪しい客よせ唄と笛で女を手玉にとってるとか...

今ではそれがゴレムにできる仕業ではないことを蔭では多くが認めだしていた。しかし、面と向かうと、おまえも株を上げたな兄弟。女と二人乗りかい？ と、あいもかわらず冷やかし一点張りなのだ。

それが何だよ？ メフルは皮肉をこめて、けるっと言り返したものだ。 さあ、ブラジルの回転木馬だよ。ちちんぷいぷい。手品のはじまり、はじまり ...

*

いつのまにやら、カーザ・ミシェルはあわただしさを増していた。翼部を広げたと思ったら、お次は二階建てに改装。そして高い煙突が聳え立つようになると、曇りがちの日など霧に煙る山々はかすみ、火花を散らしながらもくもくと煙をはいて天まで届かせる煙突の方がランドマークになった。

同郷のユダヤ人仲間は、今風の娘たちを焚きつけてメフルの方に目を向かせようとした。

子供は金のなる樹だ！ 一塊の泥人形にすぎなかったあのゴレムが、やっど一人前の男へと成長したぞ！

コケットな魅力を漂わせる娘たちはボーイハント

に熱中した。コパカバーナの宮殿のようなレストランでのナイトパーティー。そんな夢がどんどん膨らんだ。メフルの青いデラックスカーは大統領を乗せてもおかしくないほどで、この工場主の妻の座にすわることができたら、どんなに素晴らしいかというわけだった。

メフルに好印象を与えようと、きれいどころは一人残らず玉の輿を狙った。華麗な服装で身を固め、メフルを訪問するときには色仕掛けで迫る。絹のハンカチが歪んでいますよとか、幅広のネクタイが曲がっているからとか、口実を設けては髪の毛に触れたがる。

メヘレ〔=メフルの愛称〕は女たちになされるがままでいた。ところが、贅を凝らした家具調度に触れようとする客にはきびしく注文をつけた。

あわてないでくださいな。そこの階段はすべりやすいんです。それに、そこのところの手すりはペンキが塗り立てでして...くれぐれもお召し物をお汚しにならぬよう...

そして別れ際には、遠巻きに、お父さんたちに宜しく のひとことだけは怠らなかつた。

ところが娘の父親たちは、おでこに皺を寄せ、ない知恵を絞りながら、ゴレムの石頭を柔らかくしようと策を弄した。これだけの財産を手に入れるとかえって心を失うもんなのかね。あんだだっといつかは年を取る。一ヶ月後、あるいは一年後に足が立たなくなるともかぎらない。あんだだっで下着姿でみじめに死んでいきたくはなかりうに...

そんなおためごかしで迫ってくるものも少なくなかつた。

そんなにおれに嫁さんを取らせたいか？
メフルの中に棲む悪魔が相手を煙に巻く。

それももっともな話ではあるが...お人形さんみたいな箱入り娘やら、沐浴と称して日がなフラメンゴ海岸で水浴びしているリボンをつけた踊り子と結婚するわけにもゆくまい！ましてや、爪を長くしているような女なんてもってのほかだ... メフルが求めていたのは、ユダヤ風に焼かれた家庭的なロールパン、母親が毎度祝福を捧げながら焼いたようなパンでなければ相手にならないのだ。

だからいいか、わかったか？ おれが望ん

でいるのはオートミールの香りのする娘なんだ。「グート・シャベス・メフル」〔=よい安息日を祈ります〕とか、「正餐の前にはかならず手を洗ってね、メフル」とか、「おめでとう、メフル」とか、そんなふうな娘でなくっちゃ。あんたたちのところに、おれのメガネにかなういい娘はいないのか？ おい ...

こんなふうには反撃されると、だれも二の句が継げなかった。以来、この大工場主を見かけても、ああ、ゴレム様のお通りだ それだけだった。

*

ドライブから戻る途中、工場主はスピードを上げるように命じた。強い浜風が吹いていた。ひんやりとして海の香りがする。街路樹から枯葉が舞う。こんな熱帯であればこそ、秋の訪れは身に沁みるものだ。そんなことを考える。

そのとき、安息日も、祝祭もないような生活...とか言ったヘネの言葉がふと脳裡に甦った。その言葉はついに頭から離れなくなった。工場も豪邸も徹夜のパーティーを開く余裕も何もかも手に入れた。あと残っているものはといえば、たったひとつだけだった。

*

ヘネが夕食にやってくると、大きな照明器具の全てに灯りが点っていた。大きな窓も大きく開かれ、蓄音機がおかれ、玄関には色とりどりの小鳥がいた。いっぱい広がる海は部屋の奥からでも見渡せた。高波が次から次から音を立てて押し寄せては、重なり合う。そのざわめきは魅力的でもあり、物悲しくもある。窓辺の椰子の葉はカーテンと戯れている。ヘネはうっとりとした気分になって笑みをもらし、こう言った。

あらあら、みんなどうしてこんなに明るくしたがるんだい？ これじゃあ、まるでお天道様みたいじゃないか

メフルは彼女に両手を差し出しながら言う
ねえ、こっちへおいでよ

ヘネはそれでもまだ目が眩んでいるようで、小聲でぼそぼそ呟いている。

あらあら、壁のこの絵はいったい何？

いつまでも目を丸くしているヘネには何を言って

も、暖簾にうでおし、メフルは機が熟するのを待つことにした。

ねえ、あんた ヘネは少しずつ小生意気な口を利きはじめた あたしたちのところじゃ、こんな大富豪は、シナゴークにトローラー〔=聖書を記した巻物〕を寄進して、孤児の女の子と結婚するのが普通じゃなかったかい？ 金持ちにだってできることとできないことがあるかもしれないだろうけど...でも、これはいったいどういうことなんだい？ これじゃあ、まるでクリスチャンの教会みたいじゃないか？ 違いといたら、オルガンがないことだけ...

メフルは彼女のがっしりした肩に大きな手をぺたんと乗せ、浮かない顔をしている彼女の顔にかがみこんだ。そして、その小生意気な目を見据えながら、とつぜん、おれおまえで話し出した。

おい、聞いてくれよ。壁には死んだ獅子がいるし、棚にはクリスタルの花瓶がある。銀の燭台もだ。見えるだろう？ おれにはこんなものひとつも重要じゃない。冷たくて悲しげなこんな物と一緒に暮すほど、わびしいものはない。ひゅうひゅう風が吹きつけてくるみたいで、おれ、人恋しくて堪らないんだ。わが家に暖かい風を吹かせてくれるような相棒が欲しい。ここにあるものは、ぜんぶヤクザどもにくれてやっていい。やつらはおれにおし売りの術を教えてくれた。おれをからかって、笑い者にするためだ。いまじゃあ、ぺこぺこしながらやってくるけど、おれを立ててくれるような奴なんてひとりもいなかった。おれのぼろぼろの服は見ても、胸のうちまでは見ようとはしなかった。だというのに、あの死んだ獅子を見たいとなると、連中は玄関に立つ犬とどこも変わりやしない。名刺を渡して、おれが通してやるのを首を長くして待つんだ

メフルの中の塞がれていた泉が口を切った。感情の迸りははけ口を求め、火のついた目は喜びに満ちて輝いた。きらっと光る針のように、ヘネの心の中にも火が点った。メフルはいつのまにか一方の手を彼女の腰にやり、かるく溜息をついて訊ねるのだった。

おれのところで仕事を見つけようだなんて、どういう風の吹きまわしだい？

ヘネレは明るい光がいつそう明るさを増したような気がした。潮騒の音も、窓辺の椰子の梢も、みんなざわめきを強くしたように思えてならなかった。

おれの今の気持ち、わかるかい？ まるで娘に向かう父親のようにメフルは彼女の目を覗きこんだ。ねえ、あててごらん

ヘネレはいきなり彼の手をとり、その手を自分の胸に押し当てて、囁いた。

それくらい、あたしにだって判るよ
そして、付け加えた。

でもあたしはみなし子。あんたは...
すすり泣きと笑いが混じる。

そういえば、あんたもやっぱりみなし子だったね

ヘネレは真珠のような涙のしずくをこぼし、メフルの両手は濡れそぼった。風で纏れた彼女の髪を大きな手の平で包むようにして、メフルはやさしく迫った。

ヘネレ、お願いだから、自分を卑下しないでくれ。お高くとまった女なんて価値がない。おれはそういう人間だ

そして晴れがましい声で、胸のうちをあらいざらいさらけ出した。

おまえこそ、おれにぴったりの女だ。みんなが君のことをどう噂してるか、知ってるかい？ 蓼食う虫も好きずき、だってさ

*

メフルが年増のヘネと結婚するという噂を耳にした仲間、あいもかわらず、決まり文句で受け流した。泥人形はどこまでいっても泥人形のままだな

ヴェフケー徹

ヴェフケーの灰色の半コートは一方にずりさがり、反対側は手に包帯が巻かれて、ガーゼに鮮血が滲んでいる。なかば白くなった前髪は汗でおでこに貼りついていて、疲れたような青い眼は、人相の悪い巡査の顔をぼんやりと眺めている。巡査には宗教戦争と色恋沙汰という組み合わせが面白くてならないらしい。

ほんとうのことを申し上げますと... ヴェフケーは一語一語吟味しながらはっきりと言う。あたしはたしかになぐりました。あたしの娘です。鞭があればもっと打ってやるどころです。ヴェフケーの声は断固として揺るぎがなく。あれはあたしの子、つまりはユダヤ人の娘なんです。正しい生き方を教え諭す権利があたしにはある

傷を負った方の手で、ヴェフケーは汗まみれの顔をめぐり、顔は鮮血を塗りたくったようになる。

取調室の隅っこには十八歳になるヴェフケーの娘が首をうな垂れて立っている。ドヴォイレレ〔=ドヴォイレの愛称〕の金髪は太陽の光を受けて、融け出した金のように耀いている。はにかむ青い眼は静かな涙のしずくを滴らせている。気の強そうな鼻をしているが、白いハンカチの向こうから涙をすするのが聞こえる。喉にからむすすり泣きだ。

向かい側の隅にはブルネット髪の男が石のように腰掛けている。浅黒い、いかにもブラジル人といった顔立ち。人相の悪い警官と恋人の父親の間で交わされる聞きずてならないやりとりをひとことでも聞き漏らすまいと懸命のようす。

*

生まれ故郷のポーランドで、ヴェフケーは正規のユダヤ人学校には通わず、読み書きを教わる私塾で餓鬼大将をつとめ、馬の尻尾から毛を抜いたり、塾仲間のコートの釦をひきちぎったり、鞆からパンを盗んだり、村中の山羊の角をへし折ったり、ろくなことはしなかった。十歳になると天秤棒を二本かつぎ、水を汲んでユダヤ人の家を廻る母親の仕事を手伝うようになった。十三歳では婦人靴職人として早くも独立した。生活費を家に入れ、安息日の晩には「仔牛の足」が食卓に上った。それが自慢で、歪んだがたがたの食卓に腰をかけると、一家の主さながら、食卓を仕切るのだった。お母さん、お代わりをくれ。けちけちしないで、たっぷりね

靴屋の仕事台についたヴェフケーは玉座についた公爵さながら、いつもふんぞりかえっていた。あたしのサンダル、踊りが上手、ひとりで脱げて、とんでいく... ヴェフケーはのべつまくなし鼻歌を歌っていた。

ユダヤ人に生まれてよかった
ユダヤ人でほんとはよかった
墓場に行くまであたしは歌う

そんなところへ、いちばん上の兄ギンブルが豚肉屋のマンカとやらに手を出した。おかげで、蓮っ葉なその女がいきなり肩を聳やかして怒鳴りこんできたことがあった。涎を垂らした赤ん坊もいっしょだった。

結婚してよ、じゃないと、シュテートル〔＝ユダヤ人集落〕にボグロムを仕掛けるよ！

ヴェフケはいきなり家を飛び出し、広い背中をぐいと白壁におしつけて、血走ったマンカを睨みつけ、ひとこと囁いてみせた。

結婚だと？ 冗談じゃないぜ。誰かにちょっとでも相談してみりゃ、結婚しなくたっていくらでも方法があることくらい判りそうなもんだが...

マンカは歯を食いしばって、じゃあ、シナゴークにこの子を棄てようか と言う。

そこでヴェフケは女の両手をつかんで、あばずれめ、棄てるくらいなら、ここへ置いていけ！

何のことはなく、ヴェフケはそう言って乳呑み児に手を延ばし、そのまま母親に手渡した。

お母さん、いいだろ。育ててやろうぜ。ユダヤ人の子なんだ

そしてマンカに対しては 結婚だなんて、虫が好すぎる話だぜ と一蹴。

*

ブラジルに来る際、ヴェフケは木釘をいれた箱、灰色の靴紐の包み、磨いた錐、大きなワックスの塊、商売道具をひとそろい携行した。すぐにでも店が開けるように。

空には太陽がぶらさがり、雲間からも熱の塊が太い首に照りつけてくる。物憂げな街角は暑さで焦げつくようだ。みんな夕立を待っている。正気を失った椰子の樹も涼風を待ち望んでいる。ヴェフケは救援センターの世話になっていたが、四週間後には母親の拵えてくれた蕎麦団子が懐かしくてたまらなくなった。重たい革靴を引きずりながら、やつれきって歩くのだ。シャツは釦を外してはだけたまま。そのすこし僻目の青い眼は、玄関が開けばなしにな

った家があると、釘付けになった。鼻翼の張った鼻は安食堂からただよってくる揚物の匂いに敏感に反応した。とうとう彼はそんな立ち食い屋の中にずかずか押し入って、ごつい手と厚い胸板を強調しながら、いきなり流しの前に立った。水が勢いよく流れ、お皿は小気味のいい音を放った。飢えきった口は皿洗いの合間にも咀嚼を続け、喜びの声も発せられないほどだった。

空腹を癒した後、なかばふさがっていたヴェフケの目は大きく開かれた。陰鬱な表情にもあかるい笑みが浮かんだ。

ここなら食えばくれることだけはなさそうだな

彼には強い武器があった。家を借りたかと思ったら、いつのまにかその玄関先には一枚の木切れが下がるようになった。

何でも直します。靴底、かかと、子供靴、大人の靴、サンダル。みんなみんな踊りが上手、ひとで脱げて、とんでいく...

あっというまに、店の棚は履き古した靴で一杯になり、ヴェフケは靴屋の台に坐りっきりで、靴紐に蠟を塗ったり、靴底を長い糸で縫ったり、木釘を湿らせたり、ぶどうを食べるみたいに口に含んだり...そして再び歌い出すのだった。

生まれてまもない一週間
晴れてユダヤ人になる
ユダヤ人ってすばらしい

ブラジルに来て数百日を数えたとき、ヴェフケは大きな手に唾をこすりつけて、死神の登場だ。泣く子も黙る。黄金の国。ブラジルだ。ここならなんとかやっつけていける、ってなもんだ！

そして、いきなり新顔の若い娘相手に恋人漁りがはじまった。ごつい手でしごかれても笑っていられるような家庭的な「あたり籤」にはめぐりあえないものかと。

さほど時間は要しなかった。「白羽の矢」が命中したのは小柄なゴルデレ〔＝ゴルデの愛称〕だった。郷里では金持ちの親戚宅で女中をしていたが、奉公するうちに、家の若息子から袖をひきちぎられ、ス

カートをむしられ、結った髪を解かれ、惨々なめにあった。とうとうひっこみがなくなかった一家は、なんと彼女をブラジルへと厄介払いしたのだった。

ヴェフケは彼女の精彩を欠いて卑屈な姿、時代遅れの巻き毛、揺れる臀部に熱い眼差しを浴びせ、いきなり大きな手で肩を抱き寄せた。

ゴルデレ、こっちへおいで。おれがあんたに大きな家をプレゼントしよう。あんたはおれのそばの藁布団の上で、女王様のようにすやすや眠ることができる。そしておれたちのかわいい燕たちを育てようじゃないか

それからちょうど一年。はじめての燕が生まれた。それがドヴォイレ。まもなくヴェフケの靴屋が新築された。前後に大鏡をとりつけて、ステップを踏みながら靴を試着して、それを四方から眺めることができるようにした。

そのうち、ドヴォイレレは物静かで魅力的な、背の高い少女へと成長した。頬はほんのり赤く、ラビの法廷の生まれ変わりともいわんばかりだ。

娘というのは家の宝だな ヴェフケはすっかりご満悦。

ゴルデレも部屋の片隅に唾を吐いて、この子に悪い虫がつかませないように、この子がいい子に育ちますように... と願をかけた。

ドヴォイレレは本当に良い娘になった。静かな足取り、つつましい仕草、おちついた語り口、だれからも愛される娘になった。ヴェフケの隣人のキリスト教徒で、評判のいい弁護士さえもが、この優美なユダヤ人少女をこっそり横目で見ずにはおれなくなった。息子にいたっては、ドヴォイレレが目当てで、ユダヤ人の舞踏会に出かけたり、青年会の会合に参加したり、ヘブライ語学校に通ったりまでする熱の入れよう。ドヴォイレレと踊ったり、ふざけあったり、卓球したり、ついにはヴェフケの家になんかあがりこんで、自分の腕時計をヴェフケの柱時計にあわせるまでになった。ここまでくると、二人がブラックコーヒーを飲む仲になるのに、さほど時間を要しなかった。

ドヴォイレレは十六歳。ヴェフケの店はますます繁盛して、二十四人の職人を雇い、キャッシャーを買い揃えるまでになった。粧かしこんだ爪の長い異

教徒の女が黒いボタンをたたいて数字を打ちこむと、柱時計から鳩が出るように、抽斗がとびだしてくる。出たりはいつたりで忙しい抽斗。そこでヴェフケは着飾ったゴルデレに向かって目で合図を送る。

ああ、ゴルデーシ〔＝ゴルデへの愛称〕。これがブラジルだ。どう思う？ ここにきて、あの水汲み女がこんなふうになんて誰も信じないだろうな。それがここじゃあ、金がミルクのように搾っても搾っても湧いて出る。さあ、乾杯といこう！

ヴェフケは今や大勢の使用人や召し使いを使う大金持のユダヤ人だ。それでも、安息日の「ポチャイ」は欠かさない。ホルモンを煮こんだチョコレート〔＝安息日の保存食〕が何よりの好物。ドヴォイレレもヘブライ語を教わる高等学校に通いはじめた。家では伝統的な母語〔＝イディッシュ語〕を話し、何から何までユダヤ式を重んじる名門ユダヤ人の生活を営んだ。

ところがドヴォイレレが十八歳になったころ、ユダヤ人家庭の土台が揺らぎ始めた。ドヴォイレレの青く澄み切った眼に蔭りがさし、薔薇色の頬から血の気が引いた。物静かだった物腰にも小生意気さが宿り、やけに強情さが目立ってきた。そこへ、とうとうヴェフケの尖った耳に怪しい噂が入った。なんだかこの噂を隣人たちは笑い話にしているようだった。

アルト・ボアヴィスタの山中であんたのところのドヴォイレレに逢ったよ。あの弁護士さんのところの息子も一緒だった。

あんたの娘さんを映画館で見かけたよ。お隣りさんの若い子も...

噂を聞いたヴェフケの胸のうちにユダヤ人根性が燃えあがった。神を畏れる思いに身震いがきたほどだ。身を引き裂く恐怖、底知れぬ不安が胸にしるびこんだ。息子であれ娘であれ、思春期の子を持つユダヤ人の父親たちにつきまとう尋常ならざる畏怖の念だ。

おれの知ったことじゃないとか、それは勘違いだろうとか、万が一、娘が異教徒に惚れるとか、バカなことが起こったとしても...とか、ヴェフケは剣もほろろに言い放った。

郷里の家での不祥事をあらためて思い出す。ふつうのユダヤ教徒として優等生でもない一人の楽師が、娘を持ったばかりに、その言うことを聞かない娘を半裸にして、その柔肌を棒で打ちのめしたことがあった。暴行の噂は村中に広がり、心を痛めた楽師は、ついに吠えた 異教徒にくれてやるくらいなら死んだ方がましだ！ と。

眠れない晩には、この恐怖に満ちた声が聞こえてくる。ヴェフケは自分がかわいい娘のドヴォイレレをひっぱたく夢に何度もうなされるようになる。

気がついてみると開け放った窓から太陽が差し込んでいた。花盛りの庭では小鳥が囀っていた。空はぬけるように青く、ドヴォイレレの脅えたときの澄んだ眼と同じ青さだった。娘のことが気になってならないヴェフケは、やぶからぼうに娘を問いつめた。もちろん、ヴェフケは乱暴な口調をかぎりなく包み隠してやわらかく尋ねたつもりだった。

ところで、ドヴォイレレ、ご近所の噂なんだが、おまえ、お隣りさんのうちの若息子とのことで...噂になっているようなのだが...お父さんはね、あの弁護士のところの息子、腕時計をうちの時計に合わせに来るあの息子は、どうみても異教徒のように思えてしかたがないんだがな...

石のように固まって視線を地面の上に落としたドヴォイレレは、おし黙ったままだ。

まあ、いい。口の悪い連中の中傷だろう...しかし、お父さんとしては、おまえの口からはっきり聞きたい。いったいどういうことなんだ。ドヴォイレレ！

すると、がぜん元気が出たのか、ドヴォイレレは背筋を伸ばした。薔薇色の頬は真っ白で、細い声はしわがれていた。巻き毛を振り乱したために、ブロードの髪の毛がばさっと顔を覆った。

お父さん、それって本当よ
何だと？

ヴェフケの唇は蒼ざめてふるえだした。

本当か。もう一度言ってみる！

とつぜん形相を変えたヴェフケに脅えて、ドヴォイレレはもう何を言えばいいのかわからない。

でも、お父様。わたしとあの名門出のベルティーニャのどこが違うの？ あのお金持ちのマルガリ

ータだってクリスチャンとつきあってるわ。シルヴィーニャだって教養がある。お父さまもみんな素敵な方々。それなのに...

だまれ、ドヴォイレレ！ ヴェフケは机をたたいて遮った だまるんだ。おまえの口からはもう何も聞きたくない！

ヴェフケの逆上した表情からは血の気が失せ、硬直した足に死者が乗っかってゆらゆら揺れている感じだった。そして最後の力を腕にこめて、彼はわが子に手をふるった。子どもが生まれてはじめてのことだ。

ユダヤ人の風下にも置けない！なんと情けない！

石のように凝り固まったドヴォイレレの顔面からひとすじの血が流れた。ヴェフケはヴェフケで、息が詰まって、途切れ途切れにしか声が出ない。

おまえがいくらよその家の娘たちと違わないとしても、おれはそんな娘たちの父親と一緒にしないでくれ。わかるか。違う者は違うんだ。おれは筋金入りの凡人だ。だから...

ここでヴェフケはいきなり両手で顔を覆い、咽喉を詰まらせて、泣きじゃくるように言った。

おれたちは、なんと不幸な父母だろうか...

ドヴォイレレは、父親の言葉を遮った。首をうな垂れたまま、蚊の鳴くような声で言うのだ。

彼はまっすぐな人だわ。お父さん。私たち、愛し合ってるのよ。わかって

だめだ！ ヴェフケは激しく吠えた。

おれにはこれっぽちもわからない。我慢がならないんだ！

そして拳を机におしつけて椅子に坐った。

おれは死ぬ。ドヴォイレレ。いいか。ドヴォイレレ。悲しみのあまり、おれはこのまま死ぬぞ！

そこへあわてたゴルデがやってきた。

この人殺し！ 自分の子供になんてことをするのか？

窓の外には隣人たちが集まっていた。ヴェフケに煙たがられていることを百も承知のあの弁護士の息子も敷居の上に立っていた。あまりの人だかりに野次馬根性をかきたてられた巡査は、ドヴォイレレが血を流しているのを見て、さっそくヴェフケに警察

署への同行を促した。ヴェフケは、いやだ。おまえには関係ない。悲しいのはおれだ　と言って言うことを聞かない。とうとうみんなが中に押し入って、とうとう頭に来た巡査はヴェフケの腕に一撃をみまわった。おかげで自分で包帯を巻いてやらなければならなかった。というわけだ。

ヴェフケの豪邸に暗雲が垂れ込めた。庭の鳥たちもいつのまにか葬送行進曲を囀っていた。冷たい風が吹いてカーテンが巻き上がった。ヴェフケの心には穴がぼっかり明いて、傷口から血が滲むように風が沁みた。みんなは首をうな垂れたまま、巡査の後ろをぞろぞろ歩いて行く。

*

怪事件に興味を掻き立てられた警察署長が、見かけによらず細い声で説教を加えた。

グリンゴ〔＝外国人〕！ルッソ〔＝ロシア人〕！あの子がクリスチャンの恋人を作ったくらいで殴りかかるとは、理解に苦しむよ

ヴェフケは口を挟んだ。

ユダヤ人でないあなたに何が判る？

警察署長は顔は真っ赤にした。鋭い目には怒りに満ちた火花が飛んだ。色付き眼鏡を架け直して、ともかく引き下がるわけにはいかないと、気持ちを引き締めたようだ。道徳と法律と宗教をめぐる戦争が起こっている。

あなたは敬虔なユダヤ教徒だ。ひょっとしてラビとやらかい？　ややからかうような口調。

すると丸い背中を延ばし頭をぴんと立てて、ヴェフケは反論した。

あたしはどこにでもいる平凡な人間、それだけなんです。祈りの方法だって単なる自己流。でも...

ここで彼ははだけた胸を示しながら言う
この奥で何を感じているかが問題なんでして...

署長は困った顔をした。

あなたは、娘さんと宗教とどちらが大切なんだ？

娘に決まってるじゃないですか　涙を抑えながらヴェフケは言う　娘は自分の命よりも大事。だからこそ...

ドヴォイレレは泣きじゃくっている。

弁護士の子も腰がおちつかずに立ち上がる。

あなたの場合、ユダヤ教は娘さんに対する愛よりも強いてわけなんだな　署長はもう牙をむくような話し方になっている。ヴェフケはヴェフケで、化膿した傷口をむしられるときのように涙ぐんだ目を細めて、静かに、力なく答える。

判るかと言われれば、判らないとしか言えない。しかし、あたしは母親ゆずりの驕りに従っているだけなんです。しがた水汲み女でした。だからもし娘がクリスチャンと結婚するなんてことになったら、悲しみのあまり死ぬしかない。向こうが改宗しようともいうのでないかぎり...

署長の表情に暗い影が走った。大きな眼鏡の後ろで不気味な閃きが嵐のようにかけめぐったのだ。逆上した署長はヴェフケにつかみかかり、血まみれのヴェフケは開け放した入口のところにばたりと倒れた。

ちょうどそのときだった。弁護士が姿をあらわした。ヴェフケの家の側に住むあの弁護士だ。異様な雰囲気にとらえながらも、蒼ざめた息子に対しては父親的に接し、ややしどろもどろになって言う。

聞いたよ。喧嘩だって？　流血騒ぎだということから、あわてて来てみたのだが...誰かに仲裁は依頼したか？

取り乱した署長はヴェフケを助け起こす最中で、その血まみれの顔を見せるようにして、大声を出した。

こいつが頑固者でしてね。クリスチャンの嬢さんをもらうくらいなら死んだ方がましだとか言って...

弁護士は胸をはだけたヴェフケの姿を見据えた後、ドヴォイレレの泣き腫らした顔、それから息子のうちしおれた顔を見比べて、ふたたび静かに、敬意をこめてヴェフケの方に向き直った。

あなたなりに考えて、二人を別れさせないで済ませる名案は何かありませんか？

ヴェフケは顔面の血を拭い、冷静を失わないように気をつけながら、曖昧さを残さない言い回しで言い放った。

あなたの息子さんが改宗する以外にはありませ

んね

弁護士はくよくよ悩むことがない。ヴェフケの強情とはうらはらに、冷静沈着さが板についている。彼は視線の定まらない息子の方に向き直って、おまえの意見はどうなんだ？ 言ってみろ と言う。

すると、誰の目にも好感の持てる青年は、やおら居住まいを正した。静まり返った人ごみの中を冷静に見渡したかと思うと、しおらしげなドヴォイレレの美しい眼に触れ、思わず彼女の手を取った。そして、確かな足取りで、すべて意を決したとでもいうように、二人で階段を下り、警察署を立ち去ったのだった。

*

ドヴォイレレの花婿、そのキリスト教徒を改宗させるためにシナゴークに赴いたヴェフケは、ラビの顔に厳粛な皺が刻まれていることに目を奪われた。何もかもを忘れさせる表情だった。ラビの口から律法の訓えが唱えられた。

為せぬことをは為すべからず ラビは首に縄をくりつけてまで人をユダヤ教に改宗させようとは思わないのだと言う。

ヴェフケはお気に入りの俗謡の意味をはじめ深く解した ユダヤ人に生まれてよかった...

しかし、それならば、異教徒がユダヤ人になるのはもっと祝福されるべきことではないだろうか。

そのあと、ラビは、異教徒に向かって暗黒世界、ユダヤ人の過酷な運命について話し始めた。人間の欲望の醜さをあばきたて、誘惑をちらつかせては、改宗希望者の意志の強さを試すのだ。肉はもとより魂まで、全身全霊をユダヤ性の運命に差し向けなければならない。これはもうほとんど威しに近い。ヴェフケはすっかり話に吞まれてしまった。それまで直観的にありがたく受け止めていた真理にはじめてじかに触れた気分だった。そしてブラジルの少年が戒めをすべて受け入れたとき、ヴェフケのたつての要望は聞き届けられた。未来の花婿に改宗を施したいという、その夢である。

弁護士の息子のくりくりとした黒い眼は、畏敬の念を映し出していた。ラビの厳格な言葉、派手さのない質素さ、ユダヤ社会への加入儀礼の厳粛さ。単調に思っていたものが、すべて入念な計算に深く

基づいている。頭のいい彼にはそれが身に沁みて判った。父親の厚意やラビの重たい言葉。これら厄介な諸条件のすべてに吟味を加え、彼は彼なりに納得づくで新しい信仰へと歩みでたのである。心身に根ざす愛だけがそれを促したのではなかった。彼は愛するドヴォイレレの父親の、その一徹にもまた感銘を受けないではおれなかった。

*

贖罪の日の第一日。コル・ニドレの祝いに際して、新しく完成したシナゴークは光耀していた。お祝いにふさわしく窓は大きく開け放たれ、ユダヤ人がぎっしり会堂を埋め尽くしていた。大きな肩に長衣をはおったヴェフケは、自信に満ち、ぐいぐいと人ごみを掻き分け、花婿と共に前へと進み出た。純粹ブラジル人の浅黒い顔には、心なしか、ユダヤ的な光が宿っていた。ヴェフケは得意満面に浮かべて、会衆を前に演説をおこなった。

これがわが娘婿のアヴロム・ベン・アヴロムであります。皆さん、このアヴロム・ベン・アヴロムをどうか宜しくお願いいたします。

集まったみんなは周囲を取り囲み、おめでとを口にした。あとは、ただ溜息をつく。多くはそれだけだったが、なかに、こんなことを口にする者がいた。

ほんとに千人に一人の逸材だね。

すると、ヴェフケはとんがり頭から聖帽をとり、体操選手のように背筋をぴんと伸ばして、釘をさすのだった。

いいや。あんたは間違ってる。おれのような人間はごまんといる。頑固一徹、戦って、人に一步も譲らない。凡人ヴェフケは相手が誰だろうと、微動だにするもんか

母親ふたり

ブラサ・オンセ広場。ユダヤ人の肉屋のすぐわきに小さな石段があって、大きなキリスト教の教会へと通じている。ハイエ＝サラは石造りのベンチに腰掛けて、親友のベイレ＝ギトルの訪れを待っている。ところがなかなか相手が来ないので痺れが切れた。遠いイパネマ方面からたいがい毎日やってくる。母

親稼業の苦しみを繰り言のように語り合うのがめあて。ペイレ＝ギトルの表現を借りるなら、そういうことになる。

時期はちょうど過越祭（＝カレンダーでは4月から5月）の週。激しかった夏の暑さも多少和らぎ、肌寒い秋の日。高波を運んでくる強い浜風が吹き始め、雨が降っては止み、降っては止みするので、近隣の山々が涙に濡れたように霞んでみえる。

ハイエ＝サラは時代遅れの毛皮の外套に身を包み、細長の頭には黒いシルクのスカーフを巻いている。冷たい水蒸気のせいで二枚重ねの眼鏡が曇っている。

ハイエ＝サラは、ふう、しょうがないわね。どうやら今日は遅刻かしら。ふう...

そのとき、とつぜん袖を軽く引くものがいた。

何よ、あんたったら ハイエ＝サラは大声を出した 後ろからおそいかかってくるなんて、腰をぬかすじゃないの！

ペイレ＝ギトルの明るい整った顔立ちがなんだか相好を崩したように見える。少年っぽくボブカットにしている白髪頭も今日はだらしく乱れている。感情の昂ぶりを抑えるようにして彼女は静かに話し始める。

あのチンピラのせいで遅くなっちゃったわ。黒人の御者ときたら、ぺこぺこ帽子を取って土下座でもせんばかりにお辞儀して、なのにあたしを町まで送っていくのはお断わりだって言うの。オスカルの旦那さまから指示を受けてないからだって。どんでもない男よ。旦那様の母親を街まで送っていくのに、指示もへったくれもないはずなのに！

ハイエ＝サラは潤んだ目で目配せした。炎症を起こしているのか、目が充血している。それが眼鏡に反射して目が強調され、目配せが写真機のシャッターを降ろしたときのような感覚を与える。それから乾いた咳をして、ペイレ＝ギトルを制するように言うのだった。

その運転手さんのどこがいけないの？ かわいそうじゃない。あなたの息子さんたちがあなたのことはいつだって送っていけて指示を与えていたんなら話は別だけど。運転手さんだって旦那様の命令には従わなくちゃならないもの

そう話しながら、ハイエ＝サラは二人が並んで坐れるよう、もう一人分の席を空けた。彼女はペイレ＝ギトルの憂いを帯びた目に燃え盛る熱情を感じていた。これはもうとやかく言うより、泉からおのずから堰を切って水が湧き出るのを待つしかない。だから静かに腰掛けていた。二人が始めて逢った日以来、心のわだかまりが愚痴となって吹き出したのは今日がはじめてだった。愚痴は愚痴でも心の奥底から噴き出した愚痴だ。彼女には心行くまで泣かせてやり、やっと泣き止んだと思ったところで、ようやく話しかけた。

そろそろいいかしら。何があったのか聞かせて頂戴

*

ハイエ＝サラとペイレ＝ギトルが知り合ったのは船の上。ブラジルの子供に招かれてたまたま同船したというわけだ。空。水。ざわめく波。二人は胸襟を開いて苦しい胸のうちをさらけ出した。

すてきな亭主がいたの ハイエ＝サラは話した 敬虔なユダヤ教徒で、聖書の虫。子供もみんないい子たちで。神様に対しても人間に対しても同じように。ただ生活は最低で、ライ麦やソバ粉を練ったのしか口に入らない暗い日々もあった。安息日でさえブンパーニケル〔＝ライ麦パンの一種〕や残飯で食いつないだほど。そしてとうとう子どもたちは郷里を棄てた。長男はアルゼンチン、次の息子はメキシコ、真ん中はオーストラリア、残り二人はブラジル。それでも何とか助け合って、気づいてみたらおじいさんとおばあさん。

この世で暮すのもあとわずか。生活らしい生活ができるのはあの世に行ってからになると思う。身内は一人二人とあの世に渡って、夫も逝った。そこへ子どもたちが手紙を寄越した。冷え切った暖炉で料理をしているのは味気なくないか？ お墓のことが気になるのか？ でも、思い切ってこっちに来ないかって。お世辞にも清らかな国とは言えないけれど、コシャナーな食事にこだわったからって、銃を突きつけられるようなことはない。結局、真鍮のハヌカー燭台と銀の薬味入れと銅のポウルと鉄の鍋、これだけ提げて子どもたちのところへ行くとこ...

ハイエ＝サラの思い出話に、笑みを浮かべながら

ふむふむと合槌を打っていたバイレ=ギトルは、とうとう自分の番だと思った。

あたしも家族のことでは悲劇の連続だったわ。だって、連れ合いのことでは幸せ盛りを完全に棒に振りました。いわゆるワガママ男で、はっきり物をいえと文句をいつてきたかと思えば、自分勝手だとあたしを責めたり、それにその母親がまたまるでそっくりで、麵を打つのを坐ってやる人がどこにいるの、とか、ワサビは立って擦るもんじゃないでしょ、とか・・・あたしには暴君が二人いたようなもの。二人に挟まれてあたしには居場所がなかった。右往左往して、しょうことなしにラビに相談を持ちかけたんだけど、偉い偉いラビったら、ちらちらあたしの尖ったお腹を盗み見ちゃあ、大きな瘤のある鼻をひねりながら、妊婦の離婚は認められない、ですって。アルテル=レブンが生まれたから大丈夫かと思ったら、やっぱりだめだって言うんです。これじゃあ、もう埒が明かないと、あたしは男を棄てて家を出ました。それからほとんどにがんばった。みんなに同情してもらおうなんて思わなかった。あたしの方こそ許してやる立場なんだって考えて。あたしの小さな宝物は小学校に入る年齢になって、この一粒胤を一人前にしてやらないわけには行かないでしょ。レジェルカ〔=洋梨の品種〕を売ったり、レネータ〔=林檎の品種〕を売ったり、あちこちの家で床磨きをしたり...ところがね、顎に髭が生え始めたと思ったら、まだまだ顔は子供なのよ、なのに、もうお母さんの部屋じゃあ狭すぎるって。そう言って出て行っちゃったわ。結婚してね。こんどは子供よ。でも母親がみんな持って行ってしまったわ。紙切れ一枚で海を越えていったってわけ。向こうじゃあ、お金持ちなんだそうだけど。要するに、お金がすべてなのね。息子は書いてよこしたわ 「お母さん、ここまでおいでよ。のんびり暮らせるよ。ただ服装には気をつけてね。特に帽子はきれいなのかぶってくるってこと」ですって。

はっはっは、くたびれた手に、ひきずる足、肩凝り、腰痛、そんなところに帽子だなんて。いったい、あたしたちのところじゃあ帽子もくそもあったもんじゃない。村中さがしたって、麦藁帽子くらいしか夏も冬もお目にかかれない。嫁入り前の娘がお

婿さんと会うっていったって、帽子ひとつをみんなです使いまわす。そんな感じよね。でも、息子が言うんだから仕方がない。わざわざブルプリンまで行って、ピロードのベレー帽を買ったわ。べったんこのフライパンみたいなやつ。というわけで、いまブラジルに行くところ...

*

夏の日の中熱帯の猛暑の中、二人の母親は船を降りた。ハイエ=サラは腰のくびれにギャザーの入ったサテン・ドリオンのドレス、きれいにセットした髪に顔を紅潮させ、まるで安息日の礼拝を終えたばかりのような興奮をあらわにしていた。そこへ、がっしりした体格の息子ふたりが、どこにでもいそうなユダヤ人の若妻、それに六人もの孫をひきつれてあらわれ、彼女はいつしか輪の中にいた。

おばあちゃん！お義母さま！お母さん！
全員での大歓迎だ。キス、頬ずり、歓声。まるで故郷に戻ったようだった。

一方、バイレ=ギトルの前には悠然と落ち着いた足取りで、さほど背は高くないが、パナマ帽をかぶり、青い目にサングラスをかけたひとりの洒落男が近づいてきて、紳士然としたお辞儀をした。

ハロー！お母さん、ぼくのことをわからないの？ママイ〔=ママに当たるポルトガル語〕ったら...
静かな声で言った。

おお！バイレ=ギトルは緊張のあまり歯が合わなかった。あんたがアルテル=レブ南开い？ほんとに彼女には判らなかった...

バイレ=ギトルは息子の首っ玉にかじりつき、泣いて笑って大声を放ちたいと思った。ところが強ばった息子の抱擁に気持ちが萎えたような...

セニョール・オスカルは殿様めかした接吻だけで挨拶を済ませ、彼女が被っているやけにべったんこの帽子に失望の目を向けた。それから遠くから見てもびかびかだとわかる車の方を指差して言うのだった

ペピーニャとジョルジーニョが向こうで待っている
車を指差した息子の指には大きな宝石が輝いていた。

それはどういうことなんだい？バイレ=ギトルは蔑むような笑いとともに訊ねた あ

人たちはここまで来る許可がもらえないのかい？

セニョール・オスカルは何れともあれ、べったんこの帽子を脱がせ、皺まみれのドレスの埃を払い、母親を車に案内することに懸命で、返事もしない。車の前まで来ると、黒人の運転手がやけにかしこまった動作で車の大きなドアを開くのだった。

太陽の光が銀を注ぎこんだように車の中を照らし出し、中年太りのユダヤ女性がそこにいた。白い羽根をあしらった青い帽子をかぶっている。義母さま、どうぞお乗りあそばせ！ ドナ・ペーパは上品ぶった猫なで声で話しかけてきた。

ハロー、ばっちゃん！ そういつて幼いジョルジーニョもバイレ＝ギトルの手を取って、その手の甲にうやうやしく唇をつけた。

バイレ＝ギトルはよそよそしさを感じないではおれなかった。

こんなものなのかしら 彼女は声には出さず考えた お金持ちになってしまうと、こんなにも殿様っぽくなるものなのかしら？ はやくもハイエ＝サラが羨ましくてならないバイレ＝ギトルだった。

レブロン地区の高級住宅街の立つ一軒の豪邸。庭の生け垣には花が咲き誇り、着くやいなや、大きな犬のボーリエックがおそいかかかってきて、こんな歓迎は予想していなかった。心臓がとびだしそうなくらい取り乱した。

しーっ！ 体を震わせながら彼女は犬から逃げた 最悪だわ。この犬畜生、あっちいけっ！ そして思った。犬畜生の国に迷いこんだんだわ。

花の咲き乱れる庭の中へ足を踏み入れると、灼熱の太陽に木々の梢が薔薇色に色づいていた。白いカーネーションは花卉を丸めてお昼寝をしようともいうかのよう。アンジェリカの花は強い香りで人を酔わせるようだった。

そして花香る庭の向こうの大理石の宮殿が目に入ったとき、彼女はガラス張りの廊下を歩くかのように足が竦んだ。足を滑らせて思わずよろけてしまいそうなのが恐かった。大きな広間には高い円柱にブロンズの像が乗ってまどろんでいた。高そうな油絵もところ狭しと架けてある。

お母さん、何をぼんやりしているの？ ゆっくりなさってくださいよ、お母さん！ 心ここにあらざる母親を我に帰らせようとセニョール・オスカルは言った。

あたしも何が何やらわかりやしない。くわばら、くわばら バイレ＝ギトルは痩せた肩をすくめ、頭を振りながら、鳩が豆鉄砲くらったような状態のままだ 何ていう財産...何ていう贅沢...ロスチャイルドそのもの！

ドナ・ペーパはことあるごとに鐘を鳴らす。すると、そのたんびに異教徒の女中が次から次へとあらわれて、言いつけを最後まで聞き届けると、姿を消すのだった。

ジョルジーニョの部屋から甲高い声が響いてきた。

あの子ったら、何も食べようとしませんの。かわいそうに... ドナ・ペーパがジョルジーニョの泣き叫ぶ理由を説明してくれた だから口の中に突っ込むしかないんです。そうでもしないと食べないんですもの...

この齢まで苦勞に苦勞を重ねてきた百戦錬磨のバイレ＝ギトルは、にこりと笑いながら言い放った

アルテル＝レブンに食欲がなかったなんて記憶はないわ。それどころか、お腹をすかせたあの子に食べさせてやろうにもどうにもならなかったことの方が多いわね

食べきれないほどの夕食が出て、そのあと、お母さんに家を案内してさしあげましょうということになった。一階も二階もぜんぶということだ。彫りを入れた豪華な家具。ペルシア絨毯。重厚な銀食器は食器棚からあふれそう。それから広い庭や石膏を固めた中庭にも案内された。きわめつけは犬小屋。ところがその犬小屋たるや、ソファーの上に犬用のおしゃぶりまで並べられていて、おまけに浴室まで備わっている。バイレ＝ギトルは口数が少なくなり、まるで夢心地のような朦朧とした気分で、最後にひとこと言うのだった

ここまで来るのに、アルテル＝レブン、あんた、いったい何をしでかしたんだい？

何をしなかったか？ をお母さんは知りたいんだね セニョール・オスカルは物思いに耽りながら、反語で切り返した。 ブラジル人の家を一

軒一軒ノックしてまわった。焼けつく山道を歩きまわった。夜は救護センターに寝泊りした。黒大豆の汁かけ飯〔=フェジョアードはブラジルの大衆料理〕を食べた。地獄を見た。話したせばきりのない話だよ…

犬小屋の小窓から広い空が見えた。カエルの声が聞こえた。カーニヴァルの音楽も遠くで鳴り響いていた。

そこへドナ・ペーパがあらわれて、宝石をちりばめた腕時計に目をやり、小声で言った。

もう遅いわ。お義母さまを車でお送りしなくては…

ベイレ=ギトルにはいやな予感がした。

車だって？ 不安を押し隠した驚きの声で彼女は訊ねた 車って何のことだい？あたしの寝室はそんなに遠いのかい？

セニョール・オスカルはあわてて襟をゆるめた。ひどい暑苦しさを感じたのだ。何とか言い訳を考えはした。ところがドナ・ペーパが先手に出た。

遠くだなんて言ってませんわ。ほんのすぐなんです。二本目の道です。

そこでようやくセニョール・オスカルは言葉を継いだ。

お母さん！ おどおどした声だったお母さんは静かなところがお好きでしょ。その方がお祈りもできるし…食事だってコシャーでなくてはね…

ベイレ=ギトルの咽喉の奥からくすくす笑いがこみあげてきた。辛辣な、しかも涙声のような笑いだった。

でもね、お母さん！ セニョール・オスカルが母の言葉を遮った これはね、おわかりでしょ、みんなお母さんのことを考えてのこと…

ベイレ=ギトルはこみあげる笑いを抑えることができず、笑いに体をわななかせながら息子の口を塞ぎ、もう一方の手で笑い涙を拭うのだった。

いいんだよ、いいんだよ。気にしないでおくれ。あたしのことは構わないでおくれ…

あの太りぎみのポーリエクがソファァーに飛び乗り、あたりかまわず吠え出した。驚いたベイレ=ギトルはこのこぎれいな犬小屋に呆れるような眼差し

を放って、それから服の皺をただし、あらためて口にした。

いいんだよ、いいんだよ。寝るだけならどこだって同じことだもの。話し相手だってみつかるだろうし…

*

新しい床に身を横たえたとき、ブラジル第一日の奇妙な印象が不安とともに甦ってきた。下船して以来、抑えこんできた感情が、いま静かな涙となって融け出してくるのだった。

窓ごしに見える銀のメダルのように円い月も悲しげで、彼女の胸のうちを察して、静かになだめてくれるように思えた 母親は怒っちゃいけない。相手の気持ちを判ってやらなくっちゃ。人を責めずに赦すのが母親のしごとなんだから…

ベイレ=ギトルは慣れないベッドの上でいつまでも寝返りを打ち、静かにうめき、古いマットレスと一緒にうめいてくれるのに耳を傾けていた。そうすると満月がどンドン窓際に近づいてきて、もう手を延ばせば届くのではないかと思えるほど近くにきたように思えた。ところが、はっと気がつくとき、それは月ではなくて、あの憎たらしいポーリエクだった。牙をむきだしにしたポーリエクは獅子のようにうなり、布団をはいで、彼女を丸呑みにするかに思われた。

ベイレ=ギトルは凄い寝汗を掻いて悪夢から醒めた。月は黒雲の陰に隠れていた。霧のような雨が窓に帳を下ろしていた。

犬にたたられてるわ 真夜中のひとりごとだった こんな不浄な金儲けなんて…息子たちがお高くとまった育て方をするから、おばあちゃんにまで吠えるような犬になってしまう…

*

ベイレ=ギトルが甲板姉妹のハイエ=サラにひさしぶりに再会したとき、それこそし棒でのしたパン種のようにつややかな肌に驚かされた。しかも、むかしまいたいなドタ靴ではなく、軽快なサンダル履きだった。上機嫌な彼女はベイレ=ギトルの腕をつかまえて話しかけてきた。

あんたいったいどうしたの？浮かない顔して。息子さんたち、有名な富豪だって言うじゃない。息

子さんがたとの家族生活はいかが？

ハイエ = サラが住むブラサ・オンセ地区では、ユダヤ人といえば、カフェに集まって、伝票の束を繰り、顧客の品さだめに忙しく、騒がしくするのが常だった。そこへ優雅な足取りで、着飾った恰好のバイレ = ギトルがあらわれたというので、みんな珍しそうに顔をこちらに向けた。

あれがああ成り金の母親だってさ。いいわよね...

ユダヤ人の女たちは窓越しに見る彼女について、さかんに批評しあった　きれいなね...淋しそうだけど...公爵夫人に生まれついたらみたいに優雅...

バイレ = ギトルはあの独特の笑みを洩らしながら、ハイエ = サラに向かって言った。

元気はとっても元気よ。だって恵まれた家に住んでいるんだもの　彼女は言葉少なだった。

あたしもすごく元気よ　ハイエ = サラは胸を張った　うちの息子たちはあたしにおはようの挨拶をしてからでないと勤めには出て行かないし、嫁もパスタのお皿はまずあたしによそってくれるの。孫たちはあたしにくっついて離れないわ。ただ、かわいそうに、あたしの言葉が判らないらしくて、むにゃむにゃ、へんてこりんなことばかり話してる。あのむにゃむにゃには頭が痛くなるわ。ここじゃあ、大人たちだって子供の会話がちんぷんかんぷん。小さな家だけど、これがわが家ってとこかしらね　こう言って、ハイエ = サラは、小さな窓の並ぶ古家の扉を開いた　みんな息子たちが揃えてくれたの　ハイエ = サラはこぼれんばかりの笑みとともに言った　明るい部屋でしょ。枕も寝心地がいいの。それにお皿とコップ。料理がコシャーかどうか怪しいときは、自分のぶんはこうやって別に捲えるの

バイレ = ギトルの目が潤んだ。平静を装い、うす笑い浮かべながら、彼女は訊ねた。

ところで、あなたの息子さんたちは、犬は？

いきなり犬がどうかしたの？　ハイエ = サラは訊ねかえした　うちの子どもたちはただの行商人で、暑い日中、白土の坂を歩きまわって、それはもうたいへん。汗まみれになって働いてやっとの生活だもの、犬なんてとてもとても...だって飼う場所がないもの。ベッドの下くらいかしら...

ハイエ = サラは笑ってお茶を濁した。

バイレ = ギトルは声をあげて泣きたい気分になったが、それを咬み殺した。

そろそろお暇するわ。満員の市電に乗れなくなっても困るし...

ハイエ = サラの明るい部屋には西日が差しこみ、このなごやかな家庭との別れを惜しむかのようだった。

そんな無茶な！　ハイエ = サラは叫んだ

市電で帰るって、あなた本気？息子さんは大金持だって言うのに...車で迎えに来てはもらえないの？　ハイエ = サラはすっかり動転していた。

しかし、バイレ = ギトルは言葉を咬み殺した。それまでだって愚痴が愚痴とは聞こえないように言葉を選んで話してきたのだった。

うちのアルテル = レブンったらね...　今度も思いっきり表面を取り繕った　いつも仕事に疲れていて、かわいそうなの。こんなこと、あの子にはどうでもいいことだし...あの子の悩みを殖やしたくはないもの...

これでハイエ = サラはぴんときた　このひと、自分を隠してる。強がることなんか無いのに...

バイレ = ギトルの方も、帰る道すがら考えた

ハイエ = サラだってきっと本音は口にしないているんだわ...

こうして二人は互いに化かしあいながら、ほとんど毎日のように顔を合わせるようになった。最後には自分の胸のうちをさらけ出したいと思ってはいた。しかしバイレ = ギトルのブラジルでの悩みの種はいつまでも胸の奥にしまいこまれたままだった。そして、とうとう今日がやって来た。

*

さあ、何もかも打ち明けてごらんさい。バイレ = ギトル、あんたが口を開くまで帰さないわよ

ハイエ = サラは石のように固まってベンチに腰掛けているバイレ = ギトルに寄り添いつづけた。彼女の明るい目はずっとあらぬところを見ているようで、スカーフを巻き付けた頭はぐらぐら揺れ、その華奢な肩も一緒になって揺れていた。

ねえ？　ハイエ = サラは引こうとしない

だから聞かせて！話せばラクになるわ...

二人の敬虔なユダヤ女性が、毎晩、夕方のお祈りにやってくる礼拝堂からは女たちの呟きが聞こえてきた。大きな教会からも「アベマリア」が聞こえる。薄雲のかかった空に一番星が輝き始めた。

ベイレ＝ギトルは悪夢から醒めたように身震いし、なげやりに手を払って、寢言のように話を切り出した。

ラクに？誰が？あたし？そうね... そう言っ
て泣き濡れた顔をハイエ＝サラの肩に凭せかけ、それこそ二人が知り合ってから始めて声に出して泣きじゃくった。ハイエ＝サラの首にかじりつき、まるで血の繋がった姉妹に話すように、胸に蟠っていたすべてを吐き出した。

もう我慢がならないの ベイレ＝ギトルの
声は洩れていた あたしだってザルマンの誕生日がもうすぐだってことくらい知ってはいたの。お祝いの準備をする様子が耳に入ったしね。窓を飾ったり、庭掃除をしたり。教えてもらわなかったって、それくらい分かるわ。あたしだって、まがりなりにもおばあちゃんなんだから、内心心積もりはしていたの。新しい洋服とか、新しい靴とか、黒い鞆とか。息子のアルテルだって、あたしにお金は持たせてくれますからね。なのに... ベイレ＝ギトルはふたたび泣き崩れた
でも心のこもっていないお金なんて、もらって何になるの？ あの子たちは「金の仔牛」にすっかり惑わされた金の亡者になりきってしまっているの。目が眩んで、母親孝行なんて気持ち、かけられないの ベイレ＝ギトルはほとんど喚きたてるように言った
あたし、今日はもう堪忍袋の緒が切れまして。あれはみんな家に帰る車の列なんだろうけれど、あたしはぞうっとする。今日がそのゾロメレの誕生日なの。それをあたしには何も教えてくれないで...だから、あたしひとりやってきたの。あんな連中、ぐうの音も出ないほどとちめてやりたい...うちの嫁ったら、いきなりやってきて。お義母さん！だって。その体には不釣り合いな猫まで声を出して言うのよ。仕事仲間の方々がお見えになるんだって。イディッシュなんてからっきし通じない客よ。唾のように黙って坐ってるなんて、あたしに、そんなことできる？ いくらなんでも、そんなのってないでしょ...

だからあたしはもうその先は言わせなかった。言わせたらそれだけ罪作りになるわけだもの。だからあたしは彼女をにらみつけて、ひとことも言わずにそのままおん出てきたの。孫のお祝いだけ遠くからお祝いすることに決めたのよ。神様、お金に目の眩んだものたちに罰をお与えになりませんように。だってあたしの子たちなんですから。ほんとうにいたたまれないわ。張り裂けそうなほど苦しい。でもね、ハイエ＝サラ。このての罪は人の心の中に溜まるだけ溜まっていくのよ。人知れずいつまでも蟠ってね。ところがネジが弛みだすと、とつぜん、悪魔のように裏をかいて...手がつけられなくなる。ほんとにどうしようもないの。

あたしはあの人の仲間なんかじゃない。あのぴかぴか自動車の黒人運転手なんて、あたしなんか眼中にないみたいな眼であたしを見るのよ。

街まで連れて行ってくれる？って、あたし、下手に出てみたのよ。ところが、首を振って、わずらわしそうな声で、「旦那さまからの指示がありません」だって...

きっと、イディッシュも話せない誰かさんと呼んでくる用事をいいつかっているんでしょう。ああ、何もかもお金がいけないのよ。ひとを三重苦においやるのがお金。ねえ、ハイエ＝サラ。郷里じゃあ、おばあちゃんは家宝だったはずよね。パーティーともなれば上座を空けてもらって...なのに、ここじゃあ、飼い主が犬〔＝ヒントル〕を飼うみたいに、みんなが罪〔＝ジンドル〕を飼いならしてる。あの疥癬病みの犬が何よりの証拠。撫でたり、洗ってやったり、孫なんてキスまでしてやるの。それにひきかえ、母親にはあの黒人運転手なんて礼儀のひとつも示しやしない...

ついもらい泣きしてしまったハイエ＝サラは、両腕でベイレ＝ギトルを抱きしめた。ベイレ＝ギトルを見るその目は、神聖な存在を前にした目だった。静かに涙をぬぐった彼女は深く溜息を吐き出した。天の義人たちに栄光あれ！安息あれ！その義人たちとベイレ＝ギトルが重なりあってみえたのだ。

ベイレ＝ギトルもまた、わだかまっていた胸の痞えがおりるとともに、天国の扉が義人の手によって開かれる予感をおぼえた。彼女は両手を膝にのせ、

女性向きの聖書を読むときのように体を左右に揺らし、ひとり言を声に出して話し始めた。

惨めな人生だわ。あととり息子のあの子に人生すべてをくれてしまった。あと、すぐれるものは天の光明だけ。ほんとうなら家庭の中で母親は思いやりの対象だけど、そんな扱いはもうあの世でしか期待できない。それでも地上ではひとは金持ちになって、殿様然と暮らしてる。あんな家にやって来るくらいなら、黒人地区にもぐりこんだほうがまだましよ。家に帰ったって犬に吠えつかれるだけ...わかる？ハイエ=サラねえさん、犬が待ってるのよ。今日だって孫の誕生日に仲間入りする。嫁の方がまだましかって？ 遠くから手を振って、お義母さま、ちょっとファッション街まで出てまいります。ごめんあそばせ、ってな具合よ。アルテル=レブンだって、パーティー、パーティーで、名誉心だけなんだわ。ちょっとの母親サーブスにも時間が割けないらしい。手とかおでこにチュッとやるって、映画の中の男優の真似なのかしれないけれど、ばかみたい。おためごかしでしかないじゃない。あんなことされて誰が嬉しいかしら。欲しいのは真心なのに。あんな豪邸に住まなくたって、真心さえあれば、あたしは十分。どうせならユダヤの学校でも作ってもらいたいもんだわ。あたしのザロメレにも言葉が通じるように...

バイレ=ギトルはブラウスの皺をのばし、泣き濡れた顔を拭って言った。

結局、あの子たちのところに戻るしかないのかしらね、あたしたち。それにしても人間の欲って限りがないものね。百万長者になりたい気持ちって、何なのかしら。ばかみたいだわ。郷里にいた頃のアルテル=レブンが懐かしくてしかたがない。ツイツェ〔=乳首代わりのおしゃぶり〕がいつまでも離せない甘えん坊で、ツイツェリストとか呼ばれてた。なのに、ここじゃもう雲の上の存在だわ...

でもね、ハイエ=サラ バイレ=ギトルは震える手を延ばしながら言った でもこの話はここだけの話にしておいてね

元気でやるのよ ハイエ=サラは暖かくバイレ=ギトルを抱きしめ、まぶたに口づけをして、さっさと歩き出した。この穢れた場所から逃げようとするかのように。おそろしいことだけれど、これは彼女にも無縁な話ではなかった くよくよしないことよ！ 遠くからもう一度叫んだ

神様は決してお見捨てにはならないからね

ハイエ=サラは、動悸を打つ胸の奥を鎮めながら、少しは気分を変えて家の敷居を跨いだ。子どもらもう食卓に腰掛けて、食事を待ってくれていた。彼女は神に感謝と祝福を捧げた。彼女にはまだまだ先祖の遺徳がついていると言えつつも、